

和子さんへ

舟木絹世

秋田県・三四・主婦

もしも私が男性だったらきつとあなたと結婚したいと思ったことでしょう。いいえ私のみならず、あなたと出会う人、男性も女性も皆不思議とあなたに魅きつけられてしまうのでした。天性のものなのでしょう。あなたは自分が今話している相手がこう考えていて、こう答えてもらいたい、とすぐ分かってしまう人でした。

あなたと初めて会ったのは短大の入学式でした。腰までもあるきれいな髪と美しく理知的な容姿が人目をひき、私も「あの人と友達になれたら」と思ったものでした。当時さまざまな事情から外見も中味も暗かった私。それがどういうきっかけからかあなたと友達になることができ、短大卒業後は同じ職場で働けるようになったのです。けれど喜びも束の間、聡明で美しくありながら高ぶることもなく、仕事も完璧にこなすあなたと、飲み込みが遅く何をやらせても時間がかかる私とでは職場の評判も段違いで、すっかり落込んでしまった私でした。

それでも一緒に働くことのできた五年近くは、私にとって貴重な時でした。仕事も人間関係の上でも助けてもらうにつけ、どうしてこんなに調和のとれた性格の人なのだろう、と思ったものでした。

そしてお互い結婚してから、私が初めての出産の前に、あるトラブルのためあなたに電話しました。あなたに相談するしかないと思い、つい涙が出てしまうと、あなたは電話口で「泣いてもいいよ。落着くまで待てるから」と言ってくれました。私にはその言葉だけで充分でした。憧れていた人に何度も迷惑をかけるだけでした。

一人っ子だったあなたは、小さい時から家族の皆さんにこうほめられてきたのでしょうか。「和子はこの世の中でいちばん可愛くて頭が良くて心が優しいよ」。本当にあなたと出会うことができてよかったと思います。

絹世

*短大時代同級生だった和子さん。不思議と誰からも好かれ、私も憧れていました。